

ジェネラリストとタスク・グループ

ーグループワークをジェネラリスト・プラクティスの観点から整理するー

○東北福祉大学 黒田 文 (002095)

キーワード：タスク・グループ、グループワーク、ジェネラリスト・プラクティス

1. 研究目的

タスク・グループ (task groups) を介入対象にしたグループワーク (social work with groups、以下、GW と記す) 実践に対して、ジェネラリストプラクティス (以下、ジェネラリストと記す) の観点から整理するのが本研究の目的である。ソーシャルワーク (以下、SW と記す) 実践がジェネラリストになって以来、GW という言葉自体にふれる機会が少なくなったが、現実には援助場面のいたるところにグループは介在している。Yanka & Johnson (2009)は、実践者が無意識に接触しているタスク・グループを介入対象と見なし、ていくか否かでジェネラリストの質が問われると指摘する (Yanka & Johnson 2009: 3-4)。

2. 研究の視点および方法

我が国の場合、GW という言葉から想起される実践の代表格には、治療グループ、サポートグループ、レクリエーショングループがあるだろう。GW の歴史からみてこの傾向は首肯できるが、ジェネラリストが根付くに従い米国では 1980 年代頃よりタスク・グループを対象とする GW 介入の必要性が喚起され、実践者のアイデンティティ形成や実践に関する知識・技能への再確認と整理が進んでいる (Galinsky, M. J. 1986, Mayadas & Glasser 1986)。そこで本研究では、ジェネラリストの観点から GW を論じる米国の文献を中心に、その実践への理解を問い直したい。

3. 倫理的配慮

本研究に際しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した。

4. 研究結果

我が国の社会福祉士養成テキスト (社会福祉士養成講座編集委員会 2016: 61) では、Toselandの著作 (Toseland=2003: 30) に依拠し、GWの実践対象としてトリートメント・グループ (treatment group) とタスク・グループ (task group) を挙げている。他方、Yanka & Johnson (2009) はジェネラリストが射程に入れるグループタイプについては次の5種類を挙げる：1) 変容を指向したグループ (change-oriented groups)、2) サポート／セルフヘルプ・グループ (support and self-help groups)、3) 成長・発達グループ (growth and development groups)、4) 予防指向のグループ (prevention groups)、5) タスク・グループ¹ (task groups)。1)から4)のグループは我が国の実践でも射程となり、その報告も多いが、5) は介入対象として等閑視されてきた感が否めない。

¹ 具体的には、ケア会議、スタッフ会議、多職種チームなどの他、地域に存在する小グループをさす。

タスク・グループへの介入が必要となる理由は、そこでの決定事項や内容がクライアントシステムに大きく影響するからである (Paulin et al. 2000)。タスク・グループは他のグループタイプとは異なり、グループが形成される理由がメンバーの直接的ニーズから生じているというよりも、外部から発生している点に特徴がある。それ故、その実践ではトリートメントグループで要求される知識や技能とは多少異なる内容が要求されると理解する必要がある。

タスク・グループが機能不全をおこす要因としては次の4点が挙げられる (Yanka & Johnson 2009: 291) : 1) グループのニーズ内容が不明確である、2) 必要な情報が得られない、3) お互いに対して批判的、評価的な雰囲気強い、4) グループ圧力が強い、5) 目標や計画の設定が未熟である。つまり、タスク・グループではこれらの課題を意識・理解してプロセスの変容へ働きかける実践が要求される。また、タスク・グループはプログラムやアクティビティを多用しないため、ディスカッションそのものが相互作用プロセスの中心であると理解した上で、そのプロセスを変容するための介入を行う知識と技能が必要になる。Schwartz (1969) は、GWでは具体的な方法としてお互いにやり取りをする方法、その取り扱い方を変えることが実践者に求められており、それを現実の実践として体現していくことがソーシャルワーカーと他の援助専門職との違いを際立たせることだと主張する。それは社会的な諸目標を達成していくために民主的なプロセスを大事にしてきたGWの価値を実現しようとする実践でもある (Gitterman 1986)。GWの歴史や価値を学び実践に根付かせていけば、タスク・グループ介入はGW実践として相互扶助を活性化し、民主的意志決定のプロセスを促進することだと理解しうるが、それらを学ぶことに十分な時間が割かれていない我が国の現状では、タスク・グループをGW実践として意識に上らせることは容易でなくなっているのかもしれない。今後、タスク・グループを実践の射程にするには、GWが民主的な手続きを学ぶ実践体とみなされてきた歴史や価値について、改めて見直し理解する時間と機会が必要だと考えられる。

5. 考察

SWr.の中心的機能の一つに、利用者のニーズとソーシャルサービスとを結びつける媒介者となることが挙げられる。タスク・グループを実践の射程に入れるとグループワークの知識と技能がクライアントシステムにおけるサービス提供システムに刺激を与える触媒として機能すると考えられる。グループワーク実践の機能や場について捉え直すことは、ジェネラリストとしての介入を再確認し実現する一助になるのではないだろうか。

参考文献

当日の配付資料にて記す。